

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 22 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370889

研究課題名(和文) 東北地方における霊場の成立と展開-石造文化財からみた山寺立石寺-

研究課題名(英文) The establishment and development of sacred places in Tohoku district: Cultural stone artifacts from the Yamadera Risshaku-ji temple

研究代表者

荒木 志伸 (Araki, SHINOBU)

山形大学・基盤教育院・准教授

研究者番号：10326754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：石造文化財の調査法の進展に伴い、既調査分について検討の必要性が生じたため、山寺立石寺参道の磨崖供養碑の再調査をおこなった。その結果、近世前期段階から仙台市秋保周辺からも参詣者があったこと、享保年間に下野国日光から参詣者が刻んだ磨崖供養碑の、名前・年月日部分を新たに解読できた。現段階で石造文化財988基のうち約9割について調査が終了し、詳細なデータを獲得している。比較対象地である出羽三山(羽黒山・本道寺口)、松島(瑞巖寺参道・雄島)の石造文化財の調査も進めた。分析の結果、各霊場を支えた人々(地域)の相違点が判明し、山寺立石寺は近世中頃まで特に在地に強固に支えられた霊場であることが鮮明になった。

研究成果の概要(英文)：Although analysis of the cultural stone artifacts from the Risshaku-ji temple is ongoing, the portion that has already been surveyed requires further examination. We therefore present a reanalysis of the carved memorial monument at the entrance. The results of this study reveal that the present-day Akiu(Sendai) used to comprise part of the Risshaku-ji premises; we were also able to newly decipher information including the names and birthdates of people in the Kyoho era who visited Nikko. We have investigated about 90% of the known 988 cultural stone artifacts to date and have accumulated detailed data. We have also completed a survey of the cultural stone artifacts from the comparative sites of Dewasanzan and Matsushima. These results enable identification of differences between the people (regions) who supported each sacred place; it is particularly clear that the Risshaku-ji temple was a strongly supported sacred place within this region until early modern times.

研究分野：日本考古学、特に文字関係資料

キーワード：石造文化財 庶民信仰 立石寺 出羽三山 石塔 戒名

1. 研究開始当初の背景

(1) 霊場の考古学的研究

葬送儀礼や霊場の研究は、それぞれの時代に生きた人々の来世観や世界観、宗教の役割、家族の在り方、その根底にある政治や経済を探る上で、有効な手法である。

近年、考古学分野で、墓標をはじめとする石造文化財の悉皆調査が各地で盛行している。その背景には、文献の限られた地域でも悉皆調査により豊富な文字情報が新たに獲得できること、往時の一般庶民の信仰・精神面、家（家族）の成立に迫ることが可能になること、また、形式分類・石材分析から交易の問題や地域の特徴を鮮やかに描き出せるといった理由が挙げられる。

(2) 着想に至った経緯と学術的背景

山寺立石寺は、慈覚大師開山の伝承を有し『出羽風土略記』に「奥の高野」と称された東北屈指の霊場である。「ムカサリ絵馬」「夜行念仏」といった葬送に纏わる資料を豊富に有しており、現在でも死者の納骨供養が行われ、通称山寺として地元の人々の精神的な拠り所となっている。

しかし、戦国期の動乱に巻き込まれ、寺内に残る文献史料や文物は少ない。霊場の全貌に迫る研究は今日でも数を得たとは言い難く、通史的な検討に至っては皆無に等しい状況であった。

根本中堂～奥の院の参道に残存する石造文化財（磨崖供養碑、供養塔・墓標、石燈籠）は、中世以降から現代に至るまで連続と営まれた信仰の産物である。その内容は霊場としての様相を直接的に示す、絶好の資料である。しかし、質量ともに膨大なため本格的な調査がなされていない状況にあった。

2. 研究の目的

本研究は、山寺立石寺の石造文化財の悉皆調査により庶民信仰の実態を解明し、各時代における霊場としての景観を復元することを目的とする。具体的には、石造文化財 988 基の悉皆調査を実施し、形式・石材の考古学的検討及び、碑文内容の分析をおこなう。

磨崖供養碑については、従来の調査で近世前期～中頃に属し、庶民信仰の展開過程を知る上で重要な資料であることが判明した（引用文献(2)荒木 2012）。往時の景観を探る上で、ポイントとなる石造文化財群といえる。しかし、これらについては元来より風化が激しく、銘文解読が困難であった。調査・研究の経過と共に調査器具も進化し、より光量の多い懐中電灯や双眼鏡を併用することで、従来判読できていなかった銘文が解読できる可能性が出てきた。

よって、既に調査をおこなっていた磨崖供養碑 223 基については、銘文解読に関して再度調査をおこない、より精緻なデータを獲得することも本研究の課題としている。

3. 研究の方法

石造文化財ごとに「形式」「額形式」「石材」「法量（大きさ・高さ・奥行）」「銘文内容」「蓮華座等の意匠や家紋」を調査し、カードに記録する。銘文解読の際は、光量の多い LED 懐中電灯や双眼鏡などを使用する。これらの調査方法は、比較対象霊場でも同様の手法をとっている。

また、山寺立石寺の石造文化財の特徴をより鮮明にするため、比較対象として出羽三山、松島といった近隣霊場の調査および分析を行うこととした。特に出羽三山では、参道の御本坊平と山頂霊祭殿脇、また、本道寺口の石塔群を対象とした。

4. 研究成果

(1) 山寺立石寺の調査

再調査分のデータについて

従来解読できなかった碑文内容について、成果があった。

例をあげると、参道四寸道付近の 1600 年代の磨崖供養碑に、仙台・秋保からの参詣者が建立したものが 2 基確認できた。これまでは、現在の山形県外からの参詣者は、磨崖供養碑のなかには後述する享保年間のもの以外、確認できていなかった。仙台秋保周辺が、近世前期の段階から、山寺立石寺の信仰圏であったとする資料として位置付けることができそうである。

また、享保年間に下野国日光からの参詣者が建立した磨崖供養碑について、従来は解読できていなかった、施主名及び年月日等を解読することができた。

現在の調査状況

これまでの調査で、山寺立石寺の石造文化財は、988 基存在することが確認できている（引用文献(2)荒木 2012）。磨崖供養碑の再調査を実施した関係もあり、本研究の期間終了段階で全体の約 9 割について調査を完了することができている。

(2) 比較検討対象地の調査

羽黒山での調査

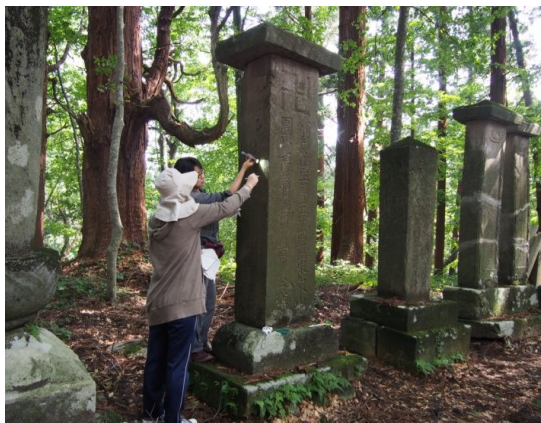
羽黒山に関しては、山頂の霊祭殿脇の 317 基、参道中腹の御本坊平の 121 基、合計 438 基の石塔について悉皆調査が完了した。

霊祭殿脇の地区では、主に 6 つの地区にわかれて石塔が分布している。E 区画には比較的古手の紀年銘が刻まれたものが多数存在していた。「寛文九年」の板碑形石塔、「寛永十八年」の笠塔婆形石塔が確認できた。また、石塔群中最大の規模をもつ「寛永」の紀年銘を有する五輪塔には、納骨孔が存在するものがあつた。

御本坊平の地区では、数量的には決して多くないものの、法量においては霊祭殿地区のそれを遥かに凌ぐものが多数存在する。銘文からは、かつての別当職に関わる石塔であることがわかる。刻まれた銘文も長文で、豊か

な内容を有している。

紀年銘は確認できないものの、その大型石塔群のなかに羽黒山の中興の祖とされる天宥法印とその隨身の名が刻まれた笠塔婆形石塔を確認することができた。



【写真1】御本坊平での調査風景
(右手一番奥が天宥法印に関わる石塔)

管見の限り、天宥に関して既存研究では触れられていない新出の資料である可能性が高い。

また、これらの大型石塔群とは別の地区の石塔には「寛文十三年」の笠塔婆形石塔に「願主庄内松根村」とあるもの、「正徳」の年号を有する板碑形石塔で「大乘妙典六十六部供養塔」「奥州仙台磐井郡赤生津小弁坊」と記されたものなどが確認できた。

本道寺口での調査

かつての登拝口の一つであった本道寺口周辺に関しては、口ノ宮湯殿山神社の参道周辺に石造文化財が密集している。これらは、既に西川町本道寺地区・大黒森プロジェクトという地域住民による調査活動が始まっていたため、関係者と協力・情報交換しながら研究、分析を進めた。

神社参道周辺の石塔群 57 基には、貞享年間から寛政年間にかけて、本道寺口を利用し参詣した人々の名や、関係した宿坊名など多くの情報が刻まれていた。その属する地域として現在の山形県内の各所をはじめ、宮城県、栃木県、福島県、群馬県の地名を確認することができた。

以上、出羽三山関係の調査成果に、松島(瑞巖寺参道・雄島)の石造文化財のデータ(引用文献(2)荒木 2015)も含めて、山寺立石寺の石造文化財の内容との比較検討をおこなった。

その結果、特に、刻まれた地名の分析とその年代から、各霊場を支えた人々(地域)の相違点が浮かび上がってきた。特に、山寺立石寺は、近世中頃までは在地(山形盆地内と最上地域の一部)に強固に支えられた霊場であることが鮮明になった。

〔引用文献〕

(1)荒木志伸、立石寺の霊場変遷と景観、『考古学雑誌』第 96 巻・第 4 号、査読有、pp11 ~ 31、2012

(2)荒木志伸『松島石造文化財調査報告書』、査読無、pp1-90、2015

5. 主な発表論文等 (研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

(1)荒木志伸、石造文化財からみた山寺立石寺、『山岳信仰』59 号、査読無、2017(掲載予定)

〔学会発表〕(計 10 件)

(1)荒木志伸・山口欧志・新野一浩・森田義史、霊場松島の考古学的研究-岩窟群の総合的調査-、日本考古学協会第 80 回総会大会(ポスターセッション)、2014、5、18、日本大学文理学部キャンパス(東京都世田谷区)

(2)荒木志伸、羽黒山参道の近世石塔に関する一考察、日本山岳修験学会第 35 回大会、2014、9、14 由利本荘市文化交流館カダール(秋田県由利本荘市)

(3)荒木志伸、榎橋地区の歴史と出羽三山信仰について、酒田市榎橋地区招待講演、2015、2、11、榎橋地区公民館(山形県酒田市)

(4)荒木志伸、葉山と甑岳の信仰について-山寺の石造文化財調査から-、村山市郷土史研究会招待講演、2015、3、12、村山市総合文化複合施設甑葉プラザ(山形県村山市)

(5)荒木志伸、霊場の成立と展開-石造文化財からみた山寺立石寺-、日本山岳修験学会第 36 回大会、2015、9、27、八王子市芸術文化会館いちようホール(東京都八王子市)

(6)荒木志伸、歴史遺産に見る地域の魅力、再発見、新たな光、埋もれていた貴重な郷土繁栄の跡、本道寺地区招待講演、2016、1、16、本道寺地区集会センター(山形県西川町)

(7)荒木志伸、霊場調査からみえてきた山形の歴史-山寺、慈恩寺、出羽三山-、国際ロータリー第 2800 地区第 5 ブロック講演会招待講演、2016、2、20、パレスグランデール(山形県山形市)

(8)荒木志伸、Lo Shugendô, culto originale giapponese della natura (日本の修験道と山岳信仰)、Centro Studi d'Arte Estremo Orientale (ボローニャ大学・東洋美術研究所招待講演)、2016、2、22、ボローニャ(イタリア)

(9)荒木志伸、山寺の歴史新発見-考古学調査による郷土の歴史-、山形市中学校長・教頭合同研修会招待講演、2016,8,3。ホテルキャッスル(山形県山形市)

(10)荒木志伸、石碑、墓石の見方、読み方-山寺立石寺・慈恩寺の調査から-、寒河江市市民講座寒河江さくらんぼ大学招待講演、2016,9,7、寒河江市市民文化会館(山形県寒河江市)

〔図書〕(計2件)

(1)荒木志伸、石川日出志、磯田道史、千田嘉博、本郷和人ほか9名、『北陸から見た日本史』、査読無、pp79-96、2015

(2)荒木志伸、『松島石造文化財調査報告書』、査読無、pp1-90、2015

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

荒木志伸 (ARAKI Shinobu)
山形大学 基盤教育院 准教授
研究者番号： 10326754